

編集：安齋育郎、山根和代

翻訳者：赤松敦子、狩俣英美、寺沢京子、山根和代、山本美穂子

東アフリカの平和博物館の紹介  
地域共同体平和博物館遺産財団創立者サルタン・ソムジー博士

東アフリカの平和博物館は 1994 年、およそ 25 年前に開館されました。その当初の目的は先住民の間でよく知られている知識と方法論を使ってケニアの様々な民族を対話の場に連れ出すということでした。1990 年代は不安定な時代で、大虐殺やアフリカ五大湖があるルワンダから紅海があるソマリアまで広い地域で散発的に紛争が起こり、ケニアはその間に位置しているので、何千もの人々が亡くなり、更に何千もの人々が難民になりました。

この頃に、平和創造についての西洋文化を基にした知識体系や方法論が、私たちには効果がないということがはっきりしたからです。私はまず私が多様な先住民の遺産に基づいて平和博物館を創立した方法を 1998 年に日本の京都と大阪で開かれた第三回国際平和博物館会議で発表しました。



アフリカの子ども兵士の平和のための地域共同体博物館の創立者、サルタン・ソムジー博士とロムダック・オケチ

20 年後、平和博物館国際ネットワーク (INMP) のニューズレターにこのアフリカに関する特集で 6 つの記事が掲載されることになりました。それらは東アフリカの平和博物館が拡大し発展していった過程と、運営方法を様々な角度から紹介しています。ロムダック・オケチの記事「アフリカの子ども兵士のための平和の地域共同体博物館を創立すること—個人的なエピソード」は感動的な話で、子ども兵士として戦ったために障

害を持っていたからこそ、世界で初めての子ども兵士の博物館を苦勞に屈せず建設したという過程を紹介しています。彼が博物館を建設した理由の一つは、自分自身を癒すため、そしてまた他の子どもたちが彼のように失われた子ども時代やトラウマに苦しむ運命を辿らなくてすむようにするためなのです。

『アフリカ平和博物館における先住民の知識』にアティム・オネンはこのように書いています。「紛争地帯にある平和博物館の重要な機能は、人の体の修復まずそれ自体について、そしてそれから暴力によるトラウマを経験した人が社会復帰できるようにすることです。地元の人々は、戦争は4つの方法で兵士の体を壊すと信じています。肉体的に、精神的に、文化的に、そして靈的に壊すということです。共同社会の遺産・独自性・先祖・そして自然または母なる大地との関係が切断されていると、その人は靈的に壊れているということです。」オネンの平和博物館では、彼女の専門である先住民の知識体系を使って「失われた世代」を修復することを支援します。紛争が起きているところでは、いろいろな NGO がその地域に持ち込んだ方法は効果がなく、草の根レベルでは受け入れられなかったため、彼女の平和博物館は地域社会の知識を利用することに立ち戻ったのです。

『グル地域社会平和博物館の起源』において館長であるフランシス・オドングヨは自分の民族、ウガンダのアチョリがなぜ平和博物館を必要としたのかとそれを作ることにどのように取り組んだかを説明しています。

今日に至るまで何千人ものアチョリの人々が永久難民としてキャンプに住んでいます。そして癒えない傷、きちんと解決されていない紛争終結、懲罰や和解を請う世代間の屈辱感により民族グループ間での紛争が頻発しています。グルの平和博物館はその最中であって、地域社会に受け入れられている仲裁を求めて行きやすい、安全な場所なのです。

ケニアの平和博物館の館長であるムヌヴェ・ムティンヤは『対話(2Bonge)が南北の平和博物館の協力を始める』において、南北の平和博物館が文化的に多様な状況の中で分かち合うことを通して、その社会の中の紛争を理解するために、どのように協力することができるかを説明しています。(例としてジェンダー、人種、少数民族や移民の軽視の問題を挙げています。)同時に、彼らは世界平和に向けて国境を越えた協力関係を築くための共通の場を探し求めています。その記事はケニアとスウェーデンの実験が大成功を収めていることを指摘しています。

次の二つの記事、キンバリー・ベイカーによる『マサイの先住民の美学を通して平和遺産の伝統を復興する』とアルベルト・パライズによる『和解と平和の伝統を分かち合う』は研究者・学者・平和構築関係者にとっての学びの場としてアフリカの平和博物館について説明しています。

これらの二つの記事は、草の根の地域共同体から学ぶことで平和のために働く創造的な方法を探求する重要性について指摘しています。ベイカーは紛争を止める時に、どのように先住民の美学が女性たちの芸術と物質文化に関連しているか話しています。パライズはイタリア沿岸部の亡命希望者キャンプに関わっており、イタリア人の若者のグループがアフリカの平和博物館への教育的な訪問をするツアーを企画実施しています。



ケニアでポコ民族の長老と共に平和の木の葉と平和の杖を持つサルタン・ソムジー

この6つのアフリカからの記事はINMPの会員の皆様のための実践報告の集成です。

最初の報告は平和博物館が、自分自身の地域共同体や国の先住民の平和の遺産をどのように展示やプログラムで国際的に活用することができるかについてです。基本的なことに聞こえるかもしれませんが、先住民の伝統は、今日の葛藤を抱えた世界において、人間の自然な関係と、全体として人間性を維持することについて教えています。

元子ども兵士による記事は、子ども兵士についての平和博物館がもっと必要であるということを私たちに示してくれます。子どもたちがアフリカや南アメリカ、アフガニスタンからイラクまで多くの場所で反乱軍の兵士として徴募され続けていることを私たちは知っています。

パライズの体験は特にヨーロッパにとって示唆に富むものです。ヨーロッパはアフリカから大勢の難民や亡命希望者が増えてきている問題に取り組んでいるからです。この記事は私たちが移民を人間として理解する必要があり、彼らの価値観を形作るある伝統を持って来ているということを示唆しています。難民管理当局やメディアは無知や政治や人種差別主義のために、このことを無視する傾向があります。ですから、難民や亡命希望者はどのような人であるのか理解しようとする関心が欠けているのです。

このアフリカについての特集は INMP の会員の皆様がお住まいの地域で、平和が本当に必要とされている人たちに手を差し伸べる際に考えるべき事柄を提供しています。また、これらの記事は北半球の INMP の会員となっている博物館に、市民社会と地域社会の構築・和解・修復のために博物館における職務と技術的な知識をどのように発展させてきたのかを示す、戦後半世紀の2つの実践についての報告を提供しています。ケニアとスウェーデンの世界的なプロジェクトは先駆的な例です。この記事の著者へのご連絡はこちらへお願いします。[here](#)

(翻訳:赤松敦子)

### アフリカ子ども兵士地域社会平和博物館を作る一個人的なエピソード

統括責任者 ロムダック・オケチ寄稿

私が 11 歳だった頃、ある晩、南スーダンの私の家から拉致され、スーダン人民解放軍 (SPLA) に無理やり入隊させられました。一夜にして私は子ども兵士になったのです。私は奥地での過酷な訓練を耐え忍びました。子ども時代に、私は武器を使って人を殺す方法を学びました。ある晩、私たちは政府軍に待ち伏せされ、結果として激しい戦闘になりました。大混乱の中で私は逃げました。何週間も何週間も重い AK47 自動

小銃を肩に下げて奥地の中を彷徨し、ついに国連のトラックが私を助けてくれました。結局、もう一つの反乱グループ、神の抵抗軍(LRA)によってキャンプが攻撃を受け、子どもたちが拉致されたので私はウガンダの難民キャンプを次々と移動することになりました。15 年後に、私は難民としてカナダに受け入れられました。



オルウェドという平和の木の下でその葉を手に持って座っている元子ども兵士たち

2014 年に私はサルタン・ソムジー博士に出会いました。博士は私にケニアの紛争地域にある平和博物館について教えてくださいました。私たちは南スーダンの私の村に子ども兵士だった人々と地域共同体の人々が集まる場をどのようにして創り出すことができるかを話し合いました。それは儀式や芸術を使って対話をすることで和解するための場です。それが戦争で壊された体を癒し平和を作りはじめるアフリカ式の方法なのです。紛争状況にある平和博物館の価値を私が理解するのに、アフリカの民族誌

学者であるソムジー博士に忍耐強くご指導  
いただいて4年かかりました。それから私は  
計画を立て、二つの仕事を掛け持ちして貯  
金をし、故郷で地域共同体を組織し、私が  
覚えている限りできるだけ多くの子ども兵士  
に集まってもらいました。インターネットを使  
って、私たちの困難に直面している人々と  
故郷のために平和博物館を建設することに  
同意を得ようと、地域社会の人々を説得し、  
教育し、その支援を得るための努力に長い  
時間をかけました。今日、「私がアフリカ子  
ども兵土地域共同体平和博物館の統括責  
任者です」と言うことに私は誇りを持ってい  
ます。

私たちは地元の郡議会から土地をご寄  
贈していただき、助成金が降りることになっ  
た時に、私たちは平和の木の木陰に伝統  
的な農家の家を博物館として建設すること  
になるでしょう。今のところ、私たちは広場  
で「トーキング・サークル(話の輪)」を開催  
しています。

私たちは子どもたちを拉致から守るため  
に地域共同体を強くするにはどうしたらよい  
かについて話し合っています。誰も子ども  
を拉致する権利はないのですから。実際に  
は子どもたちは拉致され続けていて何千人  
もの子どもたちがまだ反乱軍のキャンプに  
います。私たちは紛争の歴史について討  
議しています。地域共同体の視点や、私た

ちの祖先が発展させてきた伝統的な和解  
の実践や、口伝の文化、物質文化、儀式、  
そして和解と平和と癒しのための芸術とい  
った視点から討議するのです。私たちは子  
ども兵士の家族の生計の維持についても  
話します。私と同じ子ども兵士だった人た  
ちは、今は大人に、そして妻や子どものいる  
男性になっていますが、子ども時代に仲間  
の同国人と戦っていたので、技能や教育を  
身に着けることができていないのです。彼ら  
の多くは一日一食取ることもできないので  
す。私たち元子ども兵士は、私たちの仲間  
である同族の人の血を流させたということで  
責められることもよくあります。ですから故郷  
の地域共同体に帰って来た時に受け入れ  
てもらえるかということも、心の痛む差し迫っ  
た問題なのです。仲間を傷つけることは、ア  
フリカの文化では厳しく禁じられているので  
す。



7月にフランシス・オドングヨ氏(グル地域共同体平  
和博物館館長)を訪問するオカット・デイヴィッド(左  
アフリカ子ども兵土地域共同体博物館会計担当者)  
とロムダック・オケチ(右 同博物館館長)

アフリカ子ども兵士地域社会平和博物館のモットーは和解と、「マト・オプト」という先祖伝来の遺産である平和創造の儀式を実現することです。50年間、私たちは平和や繁栄を見ていませんが、私たちは巨大な埋蔵資源の上に座っているような状態です。まず、イギリス・エジプト領スーダンの支配に抵抗する戦争がありました。そしてアラブ民族の北スーダン政府に対する戦争があり、そして今は私たちの多様な民族性と文化の間で内戦をしています。私の目標は戦争で自分の子ども時代を失う子どもがいなくなるという私の夢を実現することです。地域共同体平和博物館を建設することは私の夢を実現することです。ついに私は自分の癒しの旅が始まったと感じています。この記事の著者にはこちら [here](#) から連絡を取ることができます。

(翻訳:赤松敦子)

### アフリカの平和博物館における先住民の知恵

南スーダン、マグウィ: アフリカの少年兵の平和博物館における先住民の知恵の保存者  
アティム・オーネン

私は人類学者で、地域の年長者から聞き取りながら研究し、当博物館で“お話会”を行っています。南スーダンのアチョリ族は、

何十年も紛争のトラウマを抱えており、西洋的な教育も平和に関する方法も全て、トラウマを知り、人々を癒して和解させることには成功していません。



イガラ族の“お話会” 彼らは紛争で分断された  
それで、アフリカの少年兵の平和博物館運営委員会(CMPACS)は、和解や癒し、そして何より私たちの“失われた世代”を社会へ戻すために、私たちの伝統的な習慣を用い、記録し、習慣に新たな息吹を吹き込むことを願って、私を先住民の知恵の保存者に指名しました。

私たちの“失われた世代”の修復で私が最も注目した儀式は、CMPACSの象徴でもある、マト・オプトと呼ばれる儀式です。これは、南スーダンの南部とウガンダ北部に住むアチョリ族の古くからの和解の儀式です。殺人に関係する罪を犯した者は、共同体の現実の世界と精神的な世界とに再び受け入れられるために、身体を用いた儀式を行います。これは、加害者と、共同体・年長者・祖先の共同体全てとをつなぐ最も有名

な儀式です。とても効果的で社会的にも受け入れられているマト・オプトには、告解、受容、償い、そして最後にマト・オプトそのものの行為(オプトを飲むこと)があります。オプトは、“オプト”の名で知られるとても苦い木の根を細かく刻んだものと、地元の醸造で、プウォモというとても酸っぱい果物の果汁とを混ぜたものです。このような苦い混ぜ物を飲み込むことができた者は、銃を持った時に彼らの頭の中にあつた怒り、年長者への無礼、共同体の習慣への傲慢さや愚かさを飲み込むことができると信じられています。



アティム・オーネン (クリップボードの側に立つ)、元少年兵たちとの“お話し会”で

将来は、先住民の植物についての知識や伝統食、また共同作業をするなどの共同体作りの慣例についての“お話し会”をするつもりです。平和博物館は、伝承を聞いたり、アチヨリ語等の失われたものを取り戻したりするための集会所です。私は、世界大戦後のヨーロッパが、復元や再建と呼んだことに従

事したいと思っています。私の願いは、“ワンウー”を作ることです。“ワンウー”とは、共同体と平和の要素(つまり、絶対的な権威・祖先・年長者・自然)との関係を見せるために、民話やなぞなぞ、自然の言語やその雰囲気語られる、暖炉のような場のことです。そこでの私の話の一つは、私たちの平和博物館の未来です。戦前は、誰もが心に苦しみを抱えながら眠りについていました。日中に苦しみを生み出した人は誰でも、日没時に仲直りしなければなりません。植物の種(地元では“ブー”や“ンゴール”として知られる)を口に入れ、少し噛みます。陽が沈む際、“兄弟は私を許してくれた。私は兄弟と二人で一人の人間になれないうちに眠りにつきたくない”と言いながら、その種を互いの胸に向けて吐き出します。筆者への連絡はこちらまでお願いします。[here](#).

(翻訳:山本美穂子)

## 北ウガンダの グル地域共同体平和博物館

館長 フランシス・オドングヨ

グル地域共同体平和博物館は北ウガンダのアチヨリ民族の住む地域にあります。アチヨリ小区域は最近まで暴力的な武装勢力の紛争の中心地で人権侵害のひどい地域でした。20年以上も神の抵抗軍(LRA)という反

乱軍がウガンダ政府と戦っており、地域社会を脅かしてきました。その反乱軍は略奪、強姦、自分の民族を殺す訓練をさせるために、子どもや大人を拉致することを繰り返してきたのです。何百人もの人々が戦争で亡くなり、百万人以上が故郷を追われました。近隣に住む部族はアチョリに対して猜疑心を抱き、敵意を持つようになりました。彼らはアチョリは皆、国の敵で LRA を支援しているとみなしたからです。LRA は民族的にはアチョリ民族の運動だったので、メディアのアチョリに対するプロパガンダによって、国全体でアチョリの地域共同体を更に憎むようになりました。アチョリは残忍な政府と反乱軍との板挟みになり、和平交渉だけが頼みの綱でした。長老たちが和平交渉と伝統に則って平和の修復ための儀式についての請願をしたのですが、不幸にもウガンダ政府はそれを拒絶しました。代わりに、ウガンダ政府は戦争を選び、殺人と強制移住の規模が更に拡大しました。地元と外国の市民団体や NGO が調整して数多くの人たちが交戦中の双方の間の「和平交渉と合意」を試みましたが、平和をもたらすことはできませんでした。

LRA は 2006 年に更に奥地へ退却したので一時的に平和が戻ってきました。しかし、憎しみと復讐心からくる恐怖と緊張は村々に残っていました。私たちは近隣の民族や政府と、そして私たちの粉々に破壊された

一族の中で和解することが絶対に必要だったのです。

2001 年にママ・エスターに率いられた三人組が、ケニアでの平和博物館会議でケニアの平和博物館の創始者であるサルタン・ソムジー博士に会いました。

そして続いて、アチョリの大族長ルオット・デイヴィッド・オネン・アカナに率いられた 4 人の族長と 5 人の長老の団が地域共同体平和博物館について学ぶために、ケニアを再び訪れました。帰りに彼らはグルとキットガムに二つの平和博物館が開館することを祝福する長老たちと一緒に「トーキング・サークル(話の輪)」を開催しました。この 2 つの博物館はケニアではよくあることですが非政府組織からの資金援助で開館式を行うことができました。

ヒューマン・ライツ・フォーカスはフォード財団に保証された資金でグル地域共同体平和博物館を立ち上げました。私たちの目標は、平和構築の伝統的な知識を探求し、多くの方に知っていただき、維持することです。なぜなら、私たちが使っていた西洋の平和構築の方法は、私たちの民族には合わなかったからです。この博物館には、儀式に使う槍(トング)や平和構築に使われるヒョウタン(アワル)などの文化的遺物の収蔵品が数多くあります。展示室は外の庭園に向かって伸びており、庭園には祝福や和解に最も重要な木である平和の木(オルウエドとオプト)や、同じく祝福の時に使われる聖なる草(オイウェク ディアング)があります。私たちはこの遺物と木を、アチョリの新



しい世代に平和構築と私たちの失われた世代について教えるために使うのです。地元や外国の平和実践家や大学関係者、指導者たちも先住民の平和構築の文化を学ぶために私たちの博物館を訪れています。グル地域共同体平和博物館はゆっくりとアチヨリの土地に平和をもたらしています。そして私たちが自尊心と主体性を取り戻すのを助けているのです。私たちは意図的に流された間違った情報のために、近隣の民族が持っていた猜疑心と嫌悪感を取り除くために、和解のための「トーキング・サークル」を提供しています。究極的には、アチヨリの習慣にあるように、私たちは紛争を終結させ、私たちの失われた世代を地域共同体に統合し直すつもりです。これはこの地域社会がそれ自体、そして先祖と共に平和になるように、私たちがしなければならないことです。著者へのご連絡はこちら [here](#) からお願いします。

(翻訳：赤松敦子)



オラムと呼ばれる平和の木の木陰に佇む  
フランシス・オドンギョオ

## 北半球と南半球の平和博物館の協力の のために対話(トゥボンゲ)を開始する

ケニアの地域共同体平和博物館遺産財団  
(CPMHF)館長 ムヌヴェ・ムティンヤ

世界の平和博物館の歴史において初めて長期の緊密な協力関係が北半球と南半球の間で発展しました。スウェーデンのウプサラにある平和の家博物館とケニアにある地域共同体平和博物館遺産財団(CPMHF)は2016年に平和のためにこの地球規模の協力関係の計画を立てました。

平和の家は2006年に設立されたNPOで、ダグ・ハマーショルドの精神に則り、教育活動や平和構築についての展示を通して、人種差別主義や暴力、偏見や不寛容に対して草の根レベルで取り組んでいます。その平和博物館が特に対象としている年代層は子どもたちと若者です。



アカンバ平和博物館の前に立つムヌヴェ・ムティンヤ  
とウプサラの平和の家博物館のジェスパー・マグナ  
ッソン

CPMHF は 1994 年にケニア人の民族誌学者であるサルタン・ソムジー博士によって始められました。その当時は激しい民族紛争の時代でした。今日、ケニアの様々な民族が居住する地域に 16 の平和博物館があります。それらは、草の根市民社会として働き、地域共同体やそれを越えたより広い社会の不平等に取り組んでいます。CPMHF は政府からは資金を得ておらず、世界の同様の市民団体、特に平和博物館との連携を求めています。

2016 年の初め頃、「トゥボンゲ」プロジェクトが平和の家と CPMHF によって共同で始められました。そのプロジェクトの名前はケニアのスラム地域で頑張っている若者によって話されるシェン語の言葉から来ており、「話をしましょう」という意味です。元々「トゥボンゲ」は約一年間の基礎プロジェクトでした。その間に、平和の家と CPMHF は違いを尊重し、共通しているところから人間関係を作って互いを理解しようと努めました。平和の家の館長であるジェスパー・マグナッソンはケニアを訪問し、私はスウェーデンを訪問しました。私たちは互いから学びながら、私たちが持っている知識と、している仕事をよく見て話し合い、一緒に計画を立てました。その後 CPMHF は、落書きアートやアニメーションや舞台芸術に取り組んでいる 25 人の若いケニアの活動家と芸術家のグループに集まってもらいました。スウェ

ーデンでは、私は平和の家のスタッフとアイデアを交換し、マルチメディア展示の技術について学び、私たちが共に進む道の計画を練り、共に働きました。ケニアに戻り、私たちの北と南の協力で「クテングワ・ナ・ジャマイ」というタイトルの 6 メートルの長さの落書き壁画アートパネルを制作しました。そのタイトルは「社会によって軽んじられて」と「男性の目を通して: 女性の二つの顔」という意味を持っています。

それからこのプロジェクトは、リーダーシップ訓練会議と文化的な題材の創作を通して発展しました。その創作活動から生まれた作品は、ジェンダーの公平さと、社会の中で軽視されている人々の人権について思索や対話を喚起するようなものでした。最後に 2018 年 2 月 23 日からナイロビ国立博物館で展示を行いました。およそ 750 人の若者がこの展示を見学しました。



左から:ムヌヴェ・ムティシヤ、フランクリン・ミチエニ、レモロイ・オレ・サクダ、ニジル・ンジェル、キャサリン・ケルボ・ボシレ、ジェスパー・マグナッソン、アントニオ・バサラ、ジェイン・アケノ・チェポティビン

「トーキング・サークル」には様々なグループの若者、男女両方がスラムや大学から参加しました。約 200 人の大人がこの展示を訪れました。芸術作品を研究している来場者が参加して行われたくだけた雰囲気  
「トゥボンゲ」討論は、参加型で活気にみちたものでした。平和の家の代表はその館長とアントニオ・バサラ氏でした。バサラ氏は平和の家の教育部門部長で、スウェーデンで子どもたちや若者と共に、人権や性的暴力の防止について取り組んでいます。平和の家博物館は現在スウェーデンの状況の中で平行展示を行うため準備しています。私たちは、この平和博物館の南北協力の次の段階を計画しています。こちらからこの記事の著者に連絡を取ることができます。

[here](#)

(翻訳:赤松敦子)

### マサイの先住民の美学を通して平和の遺産の伝統を復興させる

カナダ、バンクーバー、ブリティッシュコロンビア大学博士号取得候補者  
キンパリー・ベイカー

地域共同体平和博物館遺産財団(CPMHF)は包括的な学習内容の中に、地元の題材・手法を採用した芸術教育を取り入れることを支援しています。その重要な例の一つは、ナロックの町の近くに新しいマサイ地域共同体平和博物館を設立する

過程です。その学校は 2013 年に開校し、子どもたちに初めて初等教育を受ける機会を提供しました。規格化された西洋の教育の導入により、子どもたちの学びが地元の文化を中心としたものから離れてしまうという変化が起きました。これは地元の地域共同体の中での文化的遺産の伝統の衰退が危機的状況にあるということです。2018 年にマサイの地元の寡婦の団体が、学校の校庭に伝統的な家を建てました。それは子どもたちに自分たちの文化遺産に触れてつながりを感じ取ることのできる機会を提供するという意図を持っていました。7 月には「トゥボンゲ:女性たちの平和に不可欠な文化展示」(CPMHFとスウェーデンのウプサラにある平和の家博物館との共同展示)がその学校でも展示されました。この展示では、女性たちの平和に不可欠な文化を展示することで、先住民共同体での仲裁者、交渉者、意思決定者としてのアフリカの女性たちの榮譽を称えています。生徒たちはどのように女性の先祖たちが「ウトウ」を生み出すために芸術的表現を創造したのかについて学ぶ機会を得ました。「ウトウ」は、ジェンダーと社会の平等のために地域共同体の幸福を創ることで生み出されるのです。



マサイ地域共同体博物館  
(写真提供:キンパリー・ベイカー)

同時に、その女性たちの団体は「トーキング・サークル」に参加し、女性の平和遺産の伝統について語りました。この「トーキング・サークル」は、私の博士論文の研究『平和への道案内：紛争地帯の博物館』の一環として開催していただいたもので、文化についての助言者ムヌヴェ・ムティシヤとクイト・デニス・ンティナイも参加していました。彼らは「オルキラ」(女性のエプロン)もそこで作りました。この活動は紛争時の平和の指導者としての女性の役割の伝統を強く思いださせるものでした。伝統的にそのエプロンは母親が娘の結婚式の準備のために作るものなのです。娘が結婚して子供が生まれると、「オルキラ」が生後最初に使われるおくるみになるのです。「オルキラ」は重要な平和のシンボルなのです。それは母なる地球を意味する子宮と繋がっていることを表しているからです。母親が「オルキラ」という言葉を叫ぶだけで子どもたちは言い争いをやめるのです。そこに縫い付けてあるビーズの柄には特に美と平和を描くために色の暗号が埋め込まれているのです。美と平和は、マサイにとって一つのもので、ずっと変わらないものなのです。

この展示期間に、その女性の団体は学校の全校集会でその「オルキラ」を展示しました。この展示は教員に学校で先住民の美学を教える価値を示しました。それを教えることで(1)民族の独自性を保つ手段となり(2)

文化的遺産の伝統に繋がりを持ち続けることになり、(3)生徒たちが先住民の活動的な美学について学ぶ方法となり、(4)環境について学ぶ方法となるのです。この展示活動の成果として2つのことが挙げられます。伝統的なビーズ細工の芸術的な熟練の技術を教えるために、その女性たちが教室での芸術教育の授業を始めたことと、彼らが建てたマサイの家を地域共同体の平和博物館にすることに決定したということです。

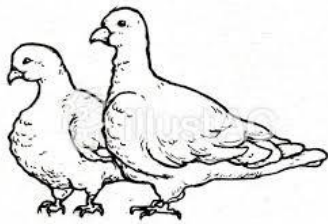


平和のエプロン「オルキラ」にビーズ細工を施すマサイの女性たち(写真提供:キンバリー・ベイカー)

2018年8月にこのマサイの女性の団体はナイロビまで旅行し、国立博物館での「トゥボンゲ」展示における会議に参加しました。この会議には女性の民族団体、若者、大学生、大学院生、地域共同体の人々が集まり、平和の遺産の伝統について対話し、共に祝いました。今後もCPMHFは、先住民の相関的な美学を通して、平和創造と和解というテーマを復興させていくよう人々を鼓舞する機会を創造していきます。このようにしてこの組織は、偏見を予防し、ジェン

ダーの平等を促進し、地域共同体の中の紛争を和解させるために、現代の平和行動主義に向かって活動しています。こちら [here](#) から筆者に連絡することができます。

(翻訳:赤松敦子)



### 癒しと平和の伝統を分かち合う

イタリアのパドヴァにあるアフリカの亡命希望者キャンプ勤務コンボーニ会 (19世紀のイタリア人宣教師ダニエレ・コンボーニ司教が創立した修道会)  
宣教師 アルベルト・パライズ

2002年に私はケニアのナイロビのスラムでカトリックの宣教師として奉仕していました。不幸なことに私たちの住んでいたところの近くで大虐殺が起こったのです。私はあの耐え難い日々ー紛争を生き延びた人々の苦しみや、暴力の拡大に対する恐怖をまだはっきりと覚えています。最初の希望の兆しは地元の宗教団体の指導者たちが集まって宗教間委員会を設立したことでした。私たちは生存者のケアを始め、またより広い範囲の地域共同体の中で癒しと和解に向けての方法を模索し始めました。ただあまりにも緊迫した状況だったので、それに対し

てどうするべきか私たちには見当が付きませんでした。それは大変複雑な問題で、危険と犯罪行為、政治的な優遇措置と汚職、そして地域共同体の様々なグループを分裂させていた民族間の緊張が絡み合った状況でした。

サルタン・ソムジー博士と地域共同体平和博物館との出会いが転機となりました。ソムジー博士はケニアの様々な地域共同体の先住民の和解と生きている平和の伝統を紹介してくださったのです。その結果、生存者とその家族が平和の木を交換し、紛争の敵味方双方の体験談を語り合うことから始めて、落ち着いて対話をすることになりました。



イタリアの亡命希望者キャンプで活動するボランティアの若者たちとアギクユ平和博物館のリディア・カリウキ

それは心理社会的、また霊的な癒しになりました。この癒しは目的意識を持った新しい人間関係と新しい生活をもたらしました。そしてこの変化は、人々をまとめ、この国の憲法を改正する手続きに着手することに至

るほど集団的、政治的な重要性を持つようになりました。私に関しては、個人的にはアフリカの霊性、和解、そして平和構築の伝統に関する経験的な洞察を得ました。この洞察は私の将来についての見通しと世界観に大きく影響を与えました。

私は 2015 年にアフリカからの亡命希望者と共に働くために、イタリアに転勤することになりました。昨年 8 月、イタリアで働き始めて 3 年後に、ケニアの 4 つの地域共同体平和博物館(ニエリ町、マカオス郡キャンザス村、エンブ町、オロシヨ・オイボー村のそれぞれにあるアギクユ、アカンバ、アエンブ、セウセウ平和博物館)を再訪する機会がありました。この時アフリカからの亡命希望者のキャンプでボランティア活動をしているイタリア人の若者のグループも一緒にこれらの博物館を訪問しました。それぞれの博物館を一目見ただけで、イタリア人の若者たちには大きな驚きでした。これらの博物館は単なる物質的な文化の展示ではなくその地域共同体の現実だったからです。ケニア人の平和の生きている伝統は過去と未来の懸け橋です。新鮮な水が湧き出続ける泉のようにこのような遺産は、地域共同体が新しい社会文化的な挑戦に取り組み、紛争や、習性となっている思考態度を変容させようとする時、助けとなるのです。一般的には、人々は伝統とは単に過去を光も影もそのままで保存しておくものだと思い込んで

ています。伝統を、ただ保存しておく代わりに、社会問題と個人の心の変容をもたらす次元にまで活かすのが地域共同体平和博物館の仕事です。地域共同体平和博物館は、文化の生活向上に資する面を促進する一方で、人々が型にはまった考え方や、歪んだ権力関係や、家長制の問題を克服する能力を発揮するために心の鍵を開けるのです。博物館が、平等主義の公開討論会である「トーキング・サークル」を開催することで、文化的な遺産によって調停される対話を通して、人々の心を繋ぎ直し、人々が祖先との関わりを取り戻すことを手伝うのです。



平和の木の下でイタリア人の若者たちに話しかける  
セウ・セウ平和博物館館長オレ・サクダ

イタリアに戻って、私たちはこの出会いに大きな刺激を受け、アフリカから来ている亡命希望者と共に働きながら、多様な平和の遺産を探し求め続けています。私たちの国が不幸なことに移民に対して敵対的になっているときに、私たちは人間関係を変容させ、

社会参加を促進するような様々な交流の機会を持つことができました。私たちは、アフリカの平和遺産に関するプロジェクトを平和の木に焦点を当ててこのキャンプに導入しました。このプロジェクトは、亡命希望者たちが彼らの伝統について話す手助けとなり、多くの物を失って自信を失っていた人々が自信を取り戻し、再び自尊心を持てるようになっていきます。このプロジェクトは、アフリカの人々のことについて耳にするのは暴力についての話がほとんどだったイタリア人を教育することにもなっています。10月3日に亡命希望者たちとイタリアの若者たちは、私たちの国の「移住犠牲者追悼記念日」が制定されたことを一緒に祝い、地中海を渡る間に亡くなったすべての人々を偲びました。様々な街で私たちはこの地域の平和と命の象徴であるオリーブの木を植えました。私たちの共通の人間性を記念し、現在とは異なる未来を創るという約束を込め、私たちが分かち合った平和の遺産を覚えておくためにオリーブを植えたのです。筆者への連絡先はこちらです。[here](#)

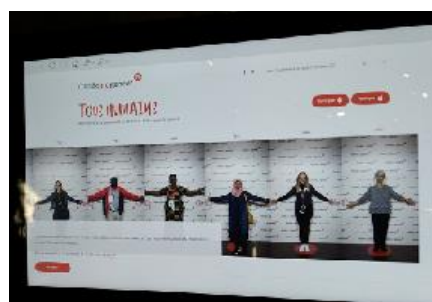
(翻訳:赤松敦子)

## ジュネーブでの展示の見学

INMP 理事、国際平和ミュージアム  
専門委員 山根和代

私はジュネーブにある国際赤十字・赤新月博物館を訪問する機会があり、また国連図書館での展示会も見ることができました。国際赤十字・赤新月博物

館の改装後の新しい展示は、私が想像していたよりはるかに感動的でした。私は日本語のヘッドフォンを渡され、自分の母国語で展示を理解することができました。このようなことは展示を理解する上で、大きな助けであると思います。日本の観光客はそこでの展示を楽しむために、フランス語や英語を理解する必要はありません。これは私の3回目の訪問でした。以前の展示では、言葉を使わずに赤十字の創設者であるヘンリー・デュナンの人生を示していました。新しい展示は、難民の個人的な証言と、人権侵害の犠牲者による力強く印象的な「証人の部屋」から成り立っています。新しい展示物は大人と子どもの両方にとって非常に教育的です。例えば、訪問者はゲームを楽しみながら、津波のような緊急事態が発生した場合の対処方法を学ぶことができます。人の行動の変革に、芸術がどのように使われているのかを見たことも印象的でした。私は壁の上で手を動かして、芸術作品を作りました。それは楽しかったですし、私の小さな行動が世界の変化につながると思うようになりました。



人間の尊厳のための人間の鎖

もう 1 つの興味深いプロジェクトは、「私たちはすべて人間です。人間の尊厳のためのチェーン」です。写真のように、誰でも写真を送信して参加できます。博物館についてのより多くの情報はウェブサイト (<https://www.redcrossmuseum.ch/en/>) と本(人道的冒険)に書かれています。2015 年には、この博物館はヨーロッパ博物館賞を受賞しました。これは過去 2 年間に発足し、近代化または拡張されたヨーロッパ博物館に授与される賞です。

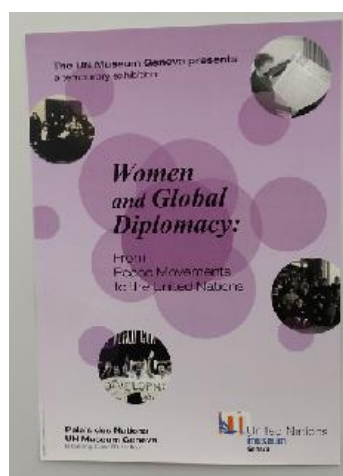
私はまた赤十字博物館の向かいにある国連図書館のジュネーブ国連博物館で「女性と世界外交：平和運動から国連へ」展を訪れました。展示会は 5 月 18 日にオープンし、10 月まで開催されました。その目的は「国際連盟と国際連合の両方を創設し、人々の間の持続的な平和と調和に向けて二つの組織の課題を設定し追求した女性の重要な貢献を示すこと」でした。展示は 3 つの期間に分けて行われました。女性と平和運動 (19-20 世紀)。女性と国際連盟 (1919 - 1946) そして女性と国際連合 (1945 年-現在) です。訪問者は、例えば、ベルタ・フォン・ズットナーとケーテ・コルヴィッツの平和の取り組み、地球規模の問題の解決に取り組んだ女性の貢献、そして男女平等と女性のエンパワメントに向けた今日の国連の取り組みについて学ぶことができました。

詳細については、[https://genderchampions.com/events/women-](https://genderchampions.com/events/women-and-global-diplomacy)

[and-global-diplomacy](https://genderchampions.com/events/women-and-global-diplomacy) を参照してください。1 分間のビデオは

<https://www.facebook.com/UNOGLibrary/videos/women-and-global-diplomacy-exhibition-un-museum-geneva/10156497978504108/>

で見ることができます。また、研究ガイドに便利なサイトとして、次の HP があります。<https://libraryresources.unog.ch/womenand-diplomacy>.



ジュネーブの国連での展示会

### ネパールの 平和博物館イニシアティブ

クンダ・ディクシット(ネパールの優れたジャーナリスト・編集者・メディアスペシャリストで、週刊ネパリ・タイムズの設立者兼編集者)は、10 年に及んだ政府軍とマオイスト(ネパール共産党毛沢東主義派)とのネパール内戦(1996~2006 年)の結果を記録するために、フォト・ジャーナリズムを活用しました。内戦では、死者 16,000 人、行方不明者約 2,000 人、何万もの負傷者と、何十万という



避難民を生みました。多くの犠牲者は、一般市民でした。



写真キャプション:ネパール内戦のインタラクティブ・アーカイブより

「戦争の骨格」と名付けられた写真のコレクションは、ディクシット氏が設立した、カトマンズにあるネパール平和博物館に展示されました。残念ながら、2015年の地震で建物が激しい損傷を受けて以降、展示物は倉庫に保管されています。「ネパール内戦—内戦後の写真回顧展」というシリーズは、2013年11～12月カリフォルニアのクレアモントにあるピッツァー大学にて公開されました。これまでに本展と移動展(「人々の戦争」)には、ネパールで50万近い人が訪れ、深く断絶されてしまった社会の平和や和解に対する考え方に関する国を挙げての議論に拍車をかけました。最近ディクシット氏は、平和博物館の再開(建物の修復と、ペンシルベニア大学と共同でバーチャル平和博物館の創造)に取り組んでいます。詳細は、「平和博物館から、ネパール内戦のイメージ」の記事をご覧ください。またはこちら

から、ネパール内戦(1996～2006年)のアーカイブをご参照ください。



クンダ・ディクシット氏の「ネパール平和博物館」は、リシュカ・プロジェクト氏(「平和博物館ウィーン(PMV)」の設立者)が設立を計画している「平和博物館ネパール」とは無関係のものです。「平和博物館ネパール」のコーディネーター、ナヴィン・K・ジャンガリ氏は、「平和博物館ウィーン」でのインターシップ経験後、「平和博物館ネパール」を設立しようという動きに刺激を受けました。芸術家(画家、彫刻家)で平和運動家の彼は、ネパールの平和と和解省で働きました。もう一人のメンバー、ビシュヌ・ビシュオカーマ氏は、ネパールで著名な芸術家で画家です。詳細は、今後HPで見られるよう現在支度中です。



2018年の始めには、国連女性機関(UN Women、2010年に国連総会決議64/289で採択・創設された、男女平等と女性の社会進出を支援する国連本部)発行の広告に、ネパールでの別の平和博物館プロジェ

クト始動が掲載されました。それは、カトマ  
ンズを拠点として働く、“女性・平和・安全保  
障・人道主義”プログラムへの国際コンサル  
タント職務記述書にあり、他の職務とともに、  
平和博物館とデジタルプラットフォームの一  
環として資料収集を行うと記載されました。

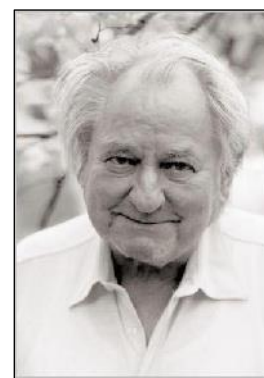
(翻訳:山本美穂子)

### 「平和ミュージアムと INMP を讃えて」

「テロの犠牲者に敬意を」というウェブサイ  
トに 2017 年 2 月、INMP についての良い  
記事が載りました。その記事には 2 分間の  
ビデオが付いていて、世界中の 20 ほどの  
平和ミュージアムが、穏やかなクラシック音  
楽を背景に紹介されています。そこで、次  
のように結論づけられています。「憎しみ、  
暴力、テロ、戦争により世界中に蔓延して  
いる死の文化を克服するために、数学、科  
学、歴史、文学と同様に、平和の価値につ  
いて学ぶ必要があります。考えてみると、平  
和ミュージアムの概念が人類の未来にとっ  
てとても重要だと分かります。なぜ、すぐに  
理解しないのか。世界中の主要都市が平  
和ミュージアムを持たないのか。私たちは  
INMP の働きを評価しています。また、下記  
のリンクから、請願に署名してもらうこと願  
っています」。

このサイトは、アメリカ全てのテロ犠牲者の  
ための記念碑設立を促しています。これ  
は、合衆国下院への請願のために、ジョン・  
R・クラークさんが始めたものです。彼の父  
親、ジェームス・B・クラーク中尉は、1979 年  
にイスタンブールでのテロで暗殺されたの  
です。

このサイトには、デイトン国際平和ミュージ  
アムに関する優れた記事も(2分足らずのビ  
デオも)あります。また、「ゲオルグ・ズンデ  
ルと平和研究の概念」にも興味を惹かれる  
でしょう。この卓越したドイツの化学者  
(1931-2007)は、第二次世界大戦後の平和  
運動を率いた人で、地球的責任のための  
技術者・科学者国際ネットワーク(INES)の創  
始者の一人で、慈善家です。(1971 年に  
は、ドイツの主要な平和基金、ベルクホフ  
財団も立ち上げました)



ゲオルグ・ズンデルさん

詳しい情報は[このサイト](#)で見ることができます。  
INMP に関する記事は[ここから](#)。デイト  
ン国際ミュージアムは[このサイト](#)で、ゲオル

グ・ズンデル氏については、こちらで見ることができます。

(翻訳:寺沢京子)

## デイトン国際平和博物館

デイトン国際平和博物館での最近の行事や活動の中で取り上げたいのは、“キング牧師に非暴力を教えた男”です。ベイヤード・ラスティンの「夢の後ろの男」は、米国オハイオ州シンシナティの作曲家スティーブ・ミロイがコーラス用、ソリストとの重奏用に編曲した1時間の聖譚曲(オラトリオ)です。この曲は、ベイヤード・ラスティン(1912～1987年)の人生をドラマティックに語ります。ラスティンは、マーティン・ルーサー・キング牧師の近しい仲間であり助言者で、キング牧師に非暴力による抵抗というガンディー思想を教えました。また彼は、キング牧師が「私には夢がある」という有名な演説を行った、1963年8月23日ワシントンの歴史的な大行進の主催でも、重要な役目を担っていました。



写真キャプション：ベイヤード・ラスティン  
(1912～1987年)

ワールド・ハウス聖歌隊のコンサートは、2018年9月6～9日までオハイオ州

のシンシナティとイエロー・スプリングスで行われました。イエロー・スプリングスにある、アンティオーク大学のコレッタ・スコット・キング・センターとも強いつながりがある聖歌隊は、2012年に“平和と相互関係の構築に努力するとともに、正義、多様性、平等の実現に向け、地域に影響を与えて動機づけできる音楽を演奏する”ために創設されました。聖歌隊の名前“ワールド・ハウス”は、全ての人が平和と正義のうちに暮らせる“ワールド・ハウス”を作らなくてはならないという、キング牧師の隠喩も指しています。

合唱はしばしば、国際平和デーや、M・L キング牧師や妻のC・S・キング氏の誕生日等の祝賀行事で披露されています。

10月12日、デイトン国際平和博物館は「アメリカの栄光と悲劇：JFK からRFK まで—1960～1968年ジョン・F・ケネディ大統領と実弟ロバート・F・ケネディ」という展覧会を開催しました。



当展覧会は、当時の貴重な写真や原稿、1960年代の展示品等があり、ビル・ホ

ワイト氏の個人コレクションを基にしています。展覧会の開会行事では、ホワイト氏がアメリカの歴史に対する情熱と、ケネディ兄弟の衝撃（1963年と1968年に暗殺）について話しました。詳細はHPよりご覧になれます。



例年のランチタイム祝賀行事

12月8日（オスロでの公式授賞式から二日後）、2018年ノーベル平和賞受賞者デニ・ムクウェゲ医師とナディヤ・ムラド氏を祝し、毎年恒例のランチタイム祝賀行事をシンクレア・コミュニティ大学で開催しました。

（翻訳：山本美穂子）

### 非暴力と平和の100年史展 （イタリア、トリノ）

イタリア、トリノ、レジス平和研究センター、エレナ・カミーノ&アンジェラ・ドリオッティ

20世紀は、二つの世界大戦と、いくつかの集団虐殺、数えきれない大虐殺という暴力によって特徴づけられます。しかしまた、政治方針や、新しい戦略や戦いの理論にな

った、効果的で集団的な実践としての非暴力という新しいものも生み出しました。数年前、より平和な世界の創造を目指して、当館は研究プロジェクトを始動し、20世紀における非暴力の戦いや抵抗の形の発展を記録し証言する、歴史的な資料の収集を始めました。この研究プロジェクトは、今まであまり知られていない語り口の写真展など、市民社会（特に若者）に向けてのプロジェクトの発展につながりました。この写真展は「非暴力と平和の100年の歴史：20世紀の100年の歴史に多様なメディアで光を当てて」と名付けられました。出来事や活動、個人の体験を語るさまざまな写真やポスター、ビデオを通して、私たちの一人一人が、私たちを圧倒するような出来事に直面しても、無力で無抵抗の状態から脱出するための確固とした力を持っているという意識の向上を目指しています。一人の個人も共同体も、非暴力的な手段で争いや紛争に立ち向かう有効な力を高めることができます。



展覧会入口で人々を出迎える、平和の象徴の鳩（写真：エンツォ・ガルガノ）

この展覧会は、3つの章と、章を横断する2つの視点とで構成されています。第1章は

「戦争へ NO:“敵”という観念を超えて」です。ここでは、「2つの世界大戦中の平和; ナチズムとファシズム下の市民の抵抗; 非暴力運動、反軍国主義行動と良心的兵役拒否の支持; 反核運動; ベトナムやバルカン諸国、イラクでの戦争への抵抗や、過去20年の紛争への市民の介入例」について語ります。

第2章は、「“サティヤーグラハ”(非暴力抵抗運動): 正義の確立のための非暴力の力」です。「植民地主義に対する非暴力と市民抵抗; 経済的・社会的正義と公民権運動; 占領、暴政、一国一党体制に対する非暴力の抵抗」を取り上げます。



ジオード(晶洞)の形をした竹のインスタレーション、非暴力運動のように、規模や諸要素を増やしつつ成長する安定性を象徴して  
(写真: エンツォ・ガルガノ)

第3章は、「“ガイア—私たちの共通の家”: 自然環境とともに平和を創造する」です。この章は、社会的、環境への暴力に対する抵抗について語ります。「工場による公害へのキャンペーン、巨大ダムや土地争奪を止めさせる運動; 動物の権利の保護法と取り組み; エコフェミニズムの発展; 先住民の保護; 気候の安定化」に触れます。写真

展を横断する2つの視点のうち1つ目は、女性による平和のための非暴力アプローチと、2つ目は、原子力の人類と環境へのリスクとの戦いです。昨年11月2日から12月2日まで開かれた展覧会でも紹介された重要な人物たちを、写真展の会期中に地元の学生達が演じました。詳細は、こちらからご覧ください。[click here.](#)

(翻訳: 山本美穂子)

### “結ばれた銃” / 非暴力の彫刻公開、 ベイルート

スウェーデンの芸術家で平和活動家、カール・フレデリック・ロイテスワルト(1934~2016年)の有名な彫刻“結ばれた銃”(世界的な非暴力のシンボルとなった)が、今回アラブ世界で初めて公開されることとなりました。レバノンのベイルート(1975~1990年の15年に及んだレバノン内戦で街を分断した国境線グリーンラインに近い海辺の街)で、10月2日の国際非暴力デー(2007年に国連で採択、ガンディーの誕生日に当たる)を祝う式で公開されました。

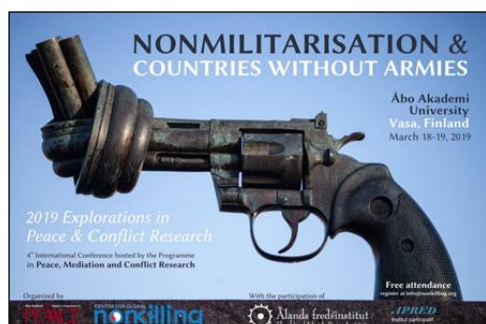


10月2日公開の“結ばれた銃”(提供: EPA 通信)

この度の公開は、レバノンの“非暴力の文化デー”の初めての執行記念でもありました。このような日は、非暴力と人権の大学(AUNOHR)の提言により、2016年10月の省令で制定されて誕生しました。レバノン、国際的な記念日を国のレベルで公式に定めた、中東で初めての国です。AUNOHRと教育省の先駆的な取り決めにより、非暴力の文化が今では学校のカリキュラムにも組み込まれました。

彫刻の除幕式は、サード・ハリリー首相の後援のもと、ガタス・フーリー氏が教育省を代表し、レバノンの主要なテレビ局を通じて、印象的なこの行事が生中継されました。主賓はガンディーの孫で、AUNOHRの国際顧問委員会の一員アルン・ガンディー氏でした。10月2日同日には、1988年の初公開から30周年を記念して、ニューヨークの国連本部でオリジナルの彫刻が“再公開”されました。詳細は、以下からご覧ください。

“結ばれた銃／ピストル”は、平和や軍縮、反軍国主義の国際的なシンボルになりました。またこのシンボルは、2019年3月18～19日フィンランドのヴァーサで行われる、軍隊を持たない国々の会議の開催発表において、最もふさわしく顕著な役割を果たしました。



2016年9月発行 INMP Newsletter 16号5ページ目のC・F・ロイテスワルト氏に関する記事もご参照ください。

(翻訳:山本美穂子)

### ガーナ大学キャンパスから ガンディー像を撤去

ガーナの首都アクラのガーナ大学キャンパスで、設置からわずか二年後の最近、ガンディー像が台座から撤去されました。2016年6月、インドのプラナブ・ムカルジー大統領の公式訪問の際、インドとガーナ二国間の協力関係の象徴として初公開されました。大統領はスピーチで、ガンディーの理想である“競争と特定化”を学生に訴えました。しかしその直後、大学教授と学生の一群は、ガンディーが弁護士として20年以上南アフリカに住んでいた時に(1893～1914年)、黒人のアフリカ人に対する人種差別と中傷的な発言をしたことを糾弾し、ガンディー像の撤去を求めて署名運動を始めました。また抗議者達は、キャンパス内のガンディーの像は、歴史的に実在した人物の唯一の像であり、大学は真っ先に、アフリカ人のヒーローやヒロインを称えるべきだとも指摘しました。ガンディーの研究者達や親戚は、若い弁護士のガンディーが南アフリカにいた頃、黒人のアフリカ人に対するいくつかの過小評価的な発言をしたことを否定してはいませんが、ガンディーがまだ無

知で、当時一般的だった用語を使用したに過ぎず、彼の物議をかもした発言は文脈から取り出されたもので、彼は学び成長した後に謝罪したと主張しています。

ガンディーは、ネルソン・マンデラ氏やデズモンド・ツツ牧師(南アフリカの真実と和解の委員会の成功はガンディー思想の影響のおかげと認めた)といったアフリカの世界的なヒーローに多大な影響を与えました。ガンディーはまた、アメリカのマーティン・ルーサー・キング牧師を刺激した、主要な人物でもありました。



写真キャプション：現在は台座から撤去されたガンディー像

物議をかもした像についての新聞記事は、以下からご覧ください。

[here](#), [here](#) & [here](#).

(翻訳:山本美穂子)



## カーリーニングラードのカント像

11月、カーリーニングラード(ロシア連邦の飛び領土)のイマヌエル・カント像と彼の墓がペンキで破壊されたと広く報道されています。第二次世界大戦とナチスの敗北の後、ドイツの住民はソビエト連邦の一部となったその都市と地域から追放されました。同時に、歴史的な都市のケーニヒスベルクの名前が変更されました。東プロイセンの首都であったこの地では、偉大な哲学者イマヌエル・カント(1724-1804)が生まれ、生涯にわたり住み、大学で教えました。1795年に彼は彼の有名なエッセイの「永遠の平和に向けて」を発表しました。それ以来、それはまだとらえどころのない目標を達成するための最も良い考えを提供している最も深い内容の著作の一つと見なされてきました。

カーリーニングラードは彼の名前を取って空港の名前を変更することによってその最も有名な住人に名誉を与えようとしていましたが、国家主義者と軍による悪意のある運動がこれを妨げてしまいました。その都市はロシアのバルト海軍艦隊の本拠地であり、海軍の年配の軍人は演説でカントの名前に汚名を着せ、軍人がそれに反対するように促しました。これと同様の(悪意のある、中傷的な)反カント宣伝の結果として、カン

トはロシア皇后エリザベスの 33%の投票に対して 25%しか支持をされませんでした。投票は国民の団結と愛国心を促進する目的で 47 の空港のために新しい名前を選ぶための公式でロシア全体のオンライン世論調査の一部でした。



エマヌエル・カントの汚された像  
(クレジット: Oksana Maitakova)

カントは、200 年後のジョン・レノンのように、平和な世界を想像しようとしていました。彼らの出身地、ケーニヒスベルク/カーリーニングラード、そしてイギリスのリバプールは、第二次世界大戦中に空爆によりひどく被害を受けました。2001 年に、リバプールは、レノンにちなんでその空港の名前を変更しました(人の名前にちなんで名付けられた国内で最初の空港)。ビートルズの高さ 2 メートルの銅像がチェックインホールにあり、その上に彼の有名な曲、イマジジンからの引用があります - 「私たちの上には、ただ空だけ」。

5 年後には、その都市(世界が) カントの生誕 300 周年を迎えますが、それは人類の最も偉大な思想家の一人を称えるために別の機会を持つことになります。BBC の詳細については、[ここをクリックしてください](#)。The Straits Times の場合は、[ここをクリックしてください](#)。ブルームバーグの記事については、[こちらにアクセスしてください](#)。詳細については、[ここをクリックして下さい](#)。



リバプールジョンレノン空港でのジョンレノンの像

(翻訳:山根和代)

ベルタ・フォン・ズットナー展  
(ジョージア、トビリシ)

10 月 22 日、ジョージア国会議事堂にて、ベルタ・フォン・ズットナー展が開催されました。アルフレッド・ノーベルの友人であり、1905 年に女性初のノーベル平和賞を受賞したズットナーは、ジョージアで 9 年間(1876-1885)、夫と共に亡命生活をおくって



いました。この期間は、彼らにとって、ジョージアの教育や文化に貢献できる実りの多い期間でもありました。

また、本展示会は、ジョージアとオーストリアの友好関係を促進するイベントとして企画され、オーストリアがヨーロッパ連盟 (EU) 理事会の議長国となり、政府の第一目標として EU 加盟を掲げているジョージアにとっても重要な時期の開催となりました。



展示会の開会式(トビリシにて)

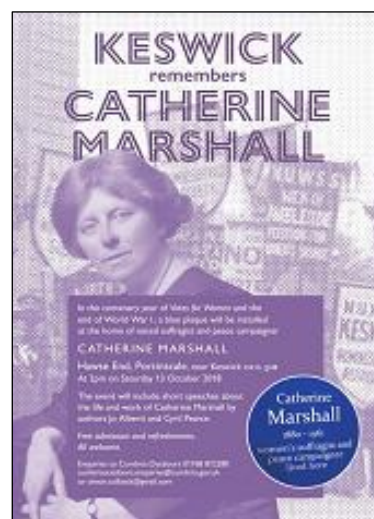
展示会は、ジョージア第一副議長のタマル・チュゴシビリ氏によって開会され、ジョージア・オーストリア親善会代表のソピオ・キラゼ氏やオーストリア大使のアラド・ベンコ氏も出席されました。ジョージア議会のウェブサイトにて詳しい[記事](#)を閲覧できます。

ベルタ・フォン・ズットナーに関する展示会は、[2018年6月](#)にジョージア国立公文書館や、[2014年10月](#)にジョージア国立博物館でも行われました(詳しくは、INMP ニュースレター23号をご参照ください。)

(翻訳:狩俣英美)

## キャサリン・マーシャルを忘れない

イギリスでの女性参政権の獲得、そして第一次世界大戦終戦から 100 周年にあたる記念すべき年に、キャサリン・マーシャル (1880-1961) の功績を讃える記念式典が、10 月 13 日、イギリス湖水地方ケズウィック近くにある彼女が住んでいた家ハウズ・エンドにて行われました。



イベントの宣伝ポスター

式典では、マーシャルの女性参政権運動家、平和活動家としての功績を記したブルー・プラーク(イギリスで建物の外壁などにはめ込まれる個人の活動を記した青いプレートのこと)が披露されました。マーシャルは、1915年にオランダのハーグで開催される女性国際会議に向けた準備を進めた数少ない女性メンバーの一人でした。同年の4月に開催されたその国際会議は、女性国

際平和自由連盟(WILPF)を発足させる基盤となります。この連盟の名前は、1919年のチューリッヒで行われた会議におけるマーシャルの提案に由来します。



また、彼女は、第一次世界大戦時、反徴兵制度協会(NCF)の名誉幹事として活動し、協会の維持に尽力しました。1916年に徴兵制が導入された際、男性たちの徴兵を拒否する権利を守るため、この協会が発足されました。リーダーとなる役員が全員拘留されたとき、マーシャルが運営を引き継ぎ、勇敢にもあらゆる手段で協会を守りました。戦後、彼女は WILPF と国際連盟への活動にいっそう力を入れ、ジュネーブに本部を置く両団体の連携に努めました。



ケズウィック近くにあるキャサリン・  
マーシャルが住んでいた家

(翻訳:狩俣英美)

## 『西から昇った太陽』

『西から昇った太陽』は、第五福竜丸の生存者の証言を記録したドキュメンタリー映画です。1954年3月、マグロ船「第五福竜丸」に乗船していた漁師が、太平洋ビキニ環礁でアメリカ軍の水爆実験により被爆するという事故が起きました。この映画のタイトルは、この事故を目撃した際に、漁師の一人が発した「見ろ！見ろ！太陽が西から昇っているぞ！」という言葉が由来となっています。第五福竜丸の船体は、現在、東京の第五福竜丸展示館のメイン展示として保存されています。

本作品は、キース・レイミンク監督のもと、アメリカのドキュメンタリー制作チームによって4年の歳月をかけて完成したものです。アメリカ人と日本人のアーティストで編成された制作チームは、日本の伝統的な語りのスタイルである「紙芝居」に立ち返り、この手法で作品を作り上げていきました。

9月には、レイミンク氏の出身地であり、彼の事務所ダリボルカ・フィルムがあるペンシルベニア州ピッツバーグにて、公開記念試写会が開催されました。映画の上映は、人々が本プロジェクトへの関心を高める手助けとなり、約3,300ドル(約34万円)もの寄付を集めました。その寄付は、第五福竜

丸展示館に贈られました。また、『西から昇った太陽』は、国境なき医師団主催の映画祭にて優秀賞に選ばれ、インディ・フェスト映画賞も受賞しました。映画祭への参加に加えて、レイミンク氏と彼のチームは、世界各地で活用できるような教育モジュールの開発も進めています。レイミンク氏とは、[こちら](#)から連絡をとることができます。また、短いながらも(約2分)印象に残る本作品のビデオクリップを[こちら](#)から見るができます。

(2018年6月発行のINMP23号16-17ページの記事もご参考ください)



もう一つの紙芝居作品も紹介します。12歳のときに長崎で被爆し、両親の死を目の当たりにした田川博康さんの物語が作品となりました。

田川さんの物語は、28枚の絵から描かれる20分ほどの紙芝居によって語られています。それぞれの絵は、長崎の三川中学校に通う生徒によって描かれました。多くの方に見ていただくために、日本語と英語の2

言語での視聴ができ、ユーチューブでも公開されています。また、彼の物語は、アメリカの経済誌フォーブスの記者ジム・クラッシュ氏とのインタビューとしても紹介され、その記事を[こちら](#)から読むことができます。[こちら](#)の記事もご参照ください。その他の情報も[こちら](#)からどうぞ。



長崎で被爆した田川博康さん  
(提供：ジム・クラッシュ)

(翻訳：狩俣英美)

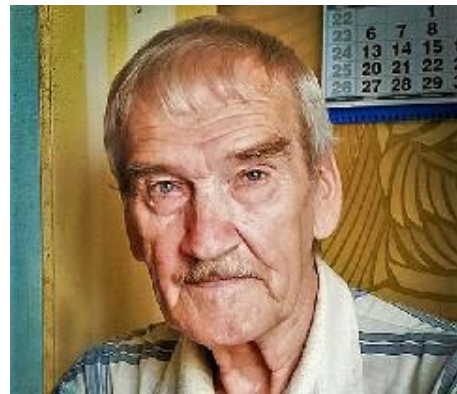
アメリカ合衆国やその他の国で必要とされる広島・長崎平和博物館

『原子力科学者会報』は最近2018年のレオナルド・M・リーザ一賞の受賞者を発表しました。この賞は2015年に創設され、毎年1000ドルが受賞者に授与されます。この賞は、次世代の若者が核兵器拡散や気候変

動から発する問題のような今存在している脅威に取り組むことを奨励することを意図しています。この賞には、マンハッタン計画に関わった退役軍人で、後に核兵器廃絶運動家となり、『原子力科学者会報』の役員会の議長を長く務め、大変尊敬されている教育者でもあり、より平和で維持可能な世界を創ろうと努力する若者の擁護者でもあった物理学者の名前が付けられています。

今年の受賞者はエリン・コノリイとケイト・ヒューイットでした。その受賞作品募集に提出された小論は「アメリカ人の学生は学校で核兵器政策について教えられていない。ここにその問題を解決する方法がある」という題でした。彼らは、この問題について研究することに協力してくれた 1100 人の大学生・高校生がこの問題に関していかに無知であるかということが分かりました。その多くは核兵器について最も基本的な知識も知らず、彼らが知らなかったことの中には、核兵器を所有している国の数と国名や、これらの兵器の歴史や現在の問題も含まれていました。この調査に協力してくれた学生達の 1% 以下しかどの国が核兵器を所有しているか知りませんでした。彼らはマンハッタン計画が実行された場所の近くにある学校を選んで調査していたのですからこの結果はなおさら驚くべきものと言えるでしょう。長崎を破壊した原爆のためのプルトニウム

が製造されたワシントン州のハンフォードの近くでも調査していたのです。



2016 年当時のスタニスラフ・ペトロフ  
(1939-2017)

彼らは、学校で 22 回の発表を行ううちに、学生たちは核兵器によって私たちが現在どのような危機に晒されているかを知らず、この話題がほとんどの学生にとって目新しいものなのだと分かったのです。大衆と政策立案者の間の知識の格差はあまりに大きくなっており、結果としてこの問題を取り巻く政策に関する話し合いは公共の場では見られなくなってしまうています。コノリイとヒューイットはこの問題について知る機会を増やし、この問題に関しての情報を得やすくする必要性を認識し、学生達に情報を提供し、興味を持ってもらい、それによって、より多くの知識に基づいた公開討論が行われるための基礎を創ろうとして、45 分の包括的なプレゼンテーションを作りました。彼らの受賞論文はこちらで読むことができます。[going here](#). より詳しい情報はこちら [click here](#) とこちら [go here](#) でご覧ください。

アメリカ合衆国とロシアは現在世界に備蓄されている核兵器の90%以上を保有しているため、核兵器についての教育は特にこれらの国では極めて重要です。しかし同様のレベルの無知やその結果引き起こされる無関心が、他の核兵器保有国のほとんどにも存在しています。

学校や大学で、この二人の若者によって導入されたような授業を実施することが重要なことです。彼らが目標としている「この問題について知る機会を増やし、この問題に関する情報を得やすくすること」は核兵器保有国のすべてに広島・長崎平和博物館を設立することで大きく進歩するでしょう。

そのような平和博物館では、スタニスラフ・ペトロフのような核時代の英雄について展示することもできるでしょう。1988年9月26日にソビエト連邦の早期警報システムが出したミサイル攻撃警報を誤警報として無効化したペトロフ(当時ソ連軍将校)の勇気ある賢い決定のおかげで、彼の国とアメリカ合衆国の全面核戦争は回避されることになりました。数か月前、その重大な決定の35回目の記念日に、ペトロフはすでに亡くなっていますが、「生命の未来賞」を受賞し5万ドルの賞金を贈呈されました。

受賞式はニューヨークの数学博物館で行われました。この博物館は、前国連事務局長潘基文がペトロフを賞賛し感謝し、世

界に向けて核兵器廃絶を訴えた場所でもありました。より詳しい記事がこちら [click here](#) とこちら [here](#) にあります。



生命の未来賞授賞式：賞の記念品を持つスタニスラフ・ペトロフの娘エレナと夫ヴィクトル：左からアリエル・コン (FLI)、ルーカス・ペリー (FLI)、ハンナ・フライ、ヴィクトル、エレナ、ステファン・マオ、マックス・テグマーク (FLI) (未来生命研究所 (FLI) 提供) ステファン・マオはドキュメンタリー映画『世界を救った男』(2014)の製作総指揮

(翻訳：赤松敦子)

### バンコクの国連関連施設での 広島・長崎被爆者ピースマスク プロジェクト展示

ピースマスクプロジェクトコーディネーター：  
ロバート・コワルチェック 寄稿

京都に本部を置く NPO であるピースマスクプロジェクト (PMP) は、ヒューマニテアリアン・アフェアーズ・アジアに招待され、バンコクにある国連アジア太平洋経済社会委員会会議センターで 2018 年 11 月 27 日から 30 日まで開催された「次世代リーダーの平和サミット」平和大使就任式で、ピースマスクプロジェクト理事のキア・キムが講演をし、

このプロジェクトを立ち上げた芸術家である金明姫(キム・ミョンヒ)がワークショップを実施しました。また「100 人の被爆者のピースマスク」の展示も行われました。

このサミットには世界中の 47 か国から集まった 17 歳から 35 歳の 350 人の若者が出席していました。その会議の期間中にキア・キムに加えて他に 4 人の来賓講演者がそれぞれ 90 分の講演と質疑応答をしました。



バンコクの国連会議センターで  
100 個の被爆者のピースマスクを展示する  
ピースマスクプロジェクトチーム

その来賓講演では、ポンヒアリー・リー財団の創始者であるポンヒアリー・リー氏が「カンボジアの大量虐殺」について、アフガニスタンとイラク戦争の両方で戦闘に参加した前元米国海兵隊兵士デレク・シュワルツ氏が軍隊での体験について、ラヒラ・ハイダリ氏は「タリバン支配化のアフガニスタンを生き延びて」の演題で、そしてヒポライト平和財団代表であるヒポライト・ンティグリルワ氏は「あるルワンダ大虐殺の生存者」につい

て講演されました。キア・キムは最後に講演し、演題は「紛争転換と平和構築のための道具としての芸術」でした。



自身のピースマスクを持つ  
ラヒラ・ハイダリ氏

「100 人の被爆者のピースマスク」は 92 歳から 8 歳までの原爆の被爆者から被曝四世までの人々の顔を型取ったもので、その中には 8 人の韓国・台湾・アメリカ合衆国の被爆者とその子孫も含まれていました。その展示は 4 日間の会議の間大きな存在感を示していました。

PMP はほぼ 2 年間多くの国際的な反核団体と協力して完成に向けて努力して参りました。このバンコクでの会議にこの展示を招待していただきましたヒューマニテアリアン・アフェアーズ・アジア、そしてこの企画をご承認いただきましたニューヨークの国連本部に大変感謝しております。この場にご招待いただきましたおかげで PMP は 100 人のマスクを作らせていただいた被爆者の方々に「大勢の方々に見ていただける適切

な国際的な会場で国際的な展示を行います」と約束したことを実現することができました。

事務局長であるキム・ソロモン氏、ヒューマニテアリアン・アフェアーズ・アジア地区理事であるジャニス・レオン氏に、不可能と思えたこの使命を現実のものとする際に、誠意をもってご努力いただきましたことに感謝の意を表したいと思います。

ヒューマニテアリアン・アフェアーズによって製作された、講演者と被爆者ピースマスクを取材したビデオをこちらで見ることができます。[here](#)

また、PMP の役員である二葉眞弓氏はバンコクまでおいでいただき、そこでこの展示のために様々なご努力をいただきました。ここに感謝を表します。ラヒラ・ハイダリィ氏にはワークショップでマスクを取るモデルになっていただきましたことに感謝申し上げます。

特に 100 人のマスクのモデルになって下さった皆様には、ご協力いただきましたお時間、ピースマスクを作成させていただく際に必要な忍耐、ピースマスク展示へのご参加に対し、最大の感謝を捧げます。

急速に変化している地政学的な状況と、過去に締結された条約からのアメリカ合衆国とロシアの最近の脱退により常に存在す

る核戦争の脅威は増してきています。このような時期において、ピースマスクプロジェクトは更に多くの方に見ただけの有意義な会場で被爆者展をすべきと信じております。核兵器に対する世界の注目度は危険なほど低くなっており、態度が無関心になっており、この問題に関する情報もあまり得られなくなってきています。まるで私たち人類にはその脅威を減らし、なくしていくためにできることは何もないかのようです。おそらく、「100 人の被爆者のピースマスク」の言葉を発することのない顔は、何をすべきかを、現実の声よりもよく表現しているのです。この活動または他のピースマスクプロジェクトについてのより詳しい情報に関するお問い合わせ、または協力についてのお知らせは当団体の理事であるキア・キムにご連絡ください。[here](#)

(翻訳: 赤松敦子)

### 広島ピースツーリズムプロジェクト

10 月に広島市は広島ピースツーリズムプロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトには、観光客が平和公園の原爆ドームだけでなく様々な場所を見ることを助けるために、多様な観光ルートを示すインタラクティブマップ(クリックすると詳細や写真が表示される地図)を作成することも含まれています。

現在、広島を訪れるすべての観光客のおよそ半分は原爆ドームを主な目的地としており他の場所へは行かないのです。

このスマートフォンなどで使えるアプリケーションで3時間から8時間で回れる4つの徒歩とバス利用の観光ルートを見ることができます。原爆の爆風の中でも残った多くの建物が保存されており、観光客の方々にこれらの被爆建物も訪れていただきたいという希望を持ってこの地図が作られました。

例えば、原爆ドーム周辺のルートには、袋町小学校平和博物館、本川小学校平和博物館、旧日本銀行広島支店が含まれています。一つ一つの被爆建物にまつわる被爆者の体験談があり、その多くは胸を刺すような悲しい体験です。



袋町小学校平和博物館の壁に書かれた親族の安否を尋ねる伝言（共同より提供）

両方の学校は原爆投下後に救護所として使われていました。それぞれの学校の壁には、愛する人の安否を尋ねる言葉が刻まれており、現在でも保存されています。もう一つのルートには中国軍管区司令部跡も含

まれています。この場所は原爆投下の最初の目標建造物だったと言われています。観光客はGPSで現在位置も示すことができるルートの表示に従って歩いていくと、これらの場所について学び、その写真を見ることができます。

このプロジェクトは、広島市内にあるこれまでは連携していなかった数多くの原爆関連施設の連携を図るという意味も持っています。このプロジェクトにより広島市の世界平和に促進についての世評を更に高めることになるでしょう。広島ピースツーリズム推進懇談会座長は元広島平和記念資料館館長原田浩氏です。

4つの観光ルートの説明には、広島軍都としての歴史や第二次世界大戦における日本の役割についての言及がほとんどないという批判も出ています。

こちらの記事 [this article](#) とこちらのツアーマップ [this tourism map](#) もご参照ください。

(翻訳: 赤松敦子)

## イギリスとウェールズ 新しい平和の道

コヴェントリーの、平和と和解への市長会議は、興味深い31の場所を示す新しい平和の道を創りました。その内容(20頁)は [こちら](#)



[オンライン](#)で観ることができます。さらに詳しく知りたい方は[このサイト](#)もご覧ください。



コヴェントリー平和と和解への市長会議 ロゴ

ウェールズにおける都市の道の幾つかは、英語とウェールズ語で出版されています。

- (1) 『カーマーゼン 平和の道』は、16 の場所を挙げる 34 頁のブックレットです。この[出版社](#)から注文することができます。
- (2) 『カーナーヴォンの平和遺跡の道』は「平和のためのウェールズ」によって作成され、[オンライン](#)で見ることができます。包括的な内容の[サイト](#)もあります。この組織は、カーディフの平和の殿堂にある「国際問題のためのウェールズ・センターの」の一部です。
- (3) この重要で立派な建物に関しては、96 頁のブックレットに書かれています。『都市の平和:カーディフを巡る平和ツアー』で、ジョン・ゴワーによって記され、出版されていますが、21 の場所が絵入りで紹介されています。

その中で最も重要な建物、平和の殿堂は 1938 年にオープンしました。



カーディフの平和殿堂

ウェールズの国際主義者で慈善家、デーヴィス・デーヴィーズさん(1880-1944)によって構想されたものです。彼は国際連盟ユニオン(1918)の創始者で、主な出資者でした。平和の殿堂 50 周年を記念して、1988 年にはウェールズ平和国際庭園が創られました。この[サイト](#)で見ることができます。

- (4) ウェールズのカーディフに次ぐ第 2 の都市、スウォンジーにも平和の道があります。「スウォンジー 平和の道: 私たちの話」という[サイト](#)があります。

(翻訳: 寺沢京子)

### 「愛・平和・音楽の殿堂」

前回の記事とうって替わり、「平和の殿堂」の創造は、8 月 29 日に他界したコルヤ・ベイシンさん(1945-2018)の熱意によります。彼は、ソ連やロシア(ソ連崩壊後)における、

ビートルズの偉大なファンで専門家でした。ソ連当局はポップ・ミュージックを、西洋のブルジョワ文化と資本主義の退廃的産物だとみなしていました。ビートルズのレコードは闇市場でしか入手できませんでした。彼は何度も「社会秩序侵害」だと逮捕されたのです。でも 1966 年までに、潜行したビートルズ・ファンクラブを作り、国中からのファンを惹きつけていました。彼は膨大な数のビートルズの記念品を集めて、サントペテルブルクの自身のアパートに展示していましたが、1991 年にはそれが博物館になりました。最も重要な品は、プラスチック・オノ・バンドのアルバム「ライブ・ピース トロント 1969」で、ジョン・レノンとオノ・ヨーコのサイン入りです。彼が 1970 年に、ジョン 30 歳の誕生日にメッセージを送った際の返礼品です。



私設ビートルズ博物館でのコルヤ・ベイシンさん

1991 年ソ連の崩壊後、彼はジョン・レノンとビートルズに捧げる「愛・平和・音楽の殿堂」を作る許可を、市から受け取りました。彼はもともと建築の勉強をしていて、屋根の

両側に 2 つの球体を持つ、64 メートルの高さの建物を設計しました。その球体には、それぞれ「愛こそすべて」と「平和を我らに」と書かれています。その殿堂は、深い信念を象徴するものです。彼はかつて「神がビートルズを私たちに送ってくれた。地球上のすべての人々をつなぐ、平和、愛、自由のメッセージをもたらしてくれた」と語っていました。多くのロック・ミュージシャンと良い関係を築いていて、資金調達のために品物を売ることも決意していたのですが、殿堂を建てるために 1000 万ドルを集めることは出来ませんでした。壮大な計画のための十分な協力を、地域の大家や文化省などから得ることが出来なかったことも、彼が生命を断つことに繋がったようです。詳しくはこの[サイト](#)で、また[ここ](#)や[別](#)の記事で読むことができます。

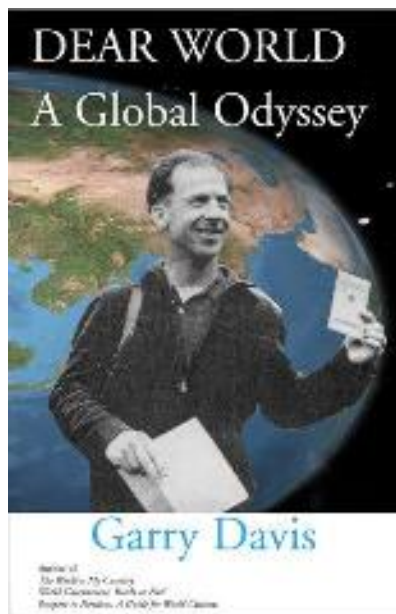
(翻訳: 寺沢京子)

### 『世界が私の国』 — 「世界市民第 1 号」ギャリー・デイヴィスについての映画

『世界が私の国』は、ギャリー・デイヴィス (1921-2013) の生涯についてのすばらしい歴史的な映像が数多く含まれる、人の心を鼓舞するような美しい驚くべきドキュメンタリー映画です。ギャリー・デイヴィスは 20 世紀の最も勇気があり、創造的で、有名な平和活動家の 1 人です。デイヴィスは、第二次

世界大戦中はアメリカ空軍の爆撃機のパイロットでしたが、1948年に彼がアメリカ国籍を放棄し、自分自身を「世界市民」として宣言したことで、世界的に有名になりました。

その翌年、彼はパリで世界市民国際登録所を設立し、75万人以上の個人がそこで世界市民として登録しました。この活動に続き、世界市民の世界政府、そして執行運営局としてワールド・サーヴィス・オーソリティを創立しました。ワールド・サーヴィス・オーソリティは有名な「世界パスポート」を発行しました。



デイヴィス自身は1956年に初めてそのパスポートを使用し、それ以来世界中の多くの世界市民によって使用され、多くの成功を収めてきました。この団体は世界人権宣言により権限を与えられた5百万近くの世界パスポートや、政治亡命カードや、その他の人権に関する文書を発行してきました。

この映画は2017年4月にミネアポリス—セント・ポール国際映画祭で初公開され、今までのところ、映画祭においてのみ上映されています。上映された映画祭では大絶賛されスタンディングオベーションを受けています。

この映画の題は1961年に出版された彼の最初の回想録の題からつけられています。それは後に『私の国は世界:世界市民の冒険』としても出版されています。マーティン・シーンによって紹介されるこの映画の短いですが素晴らしい予告編がこちらで見られます。 [here](#)

この映画のプロデューサーであり監督でもあるアーサー・カネギスによる14分のインタビューがこちらで見られます。 [here](#) またこちらにもこの映画に関する情報があります。 [here](#)、 [click here](#)、 [here](#),

この大変教育的で精神を高揚させる楽しい映画は平和博物館や高校で上映されるべき作品です。世界中の平和運動や平和団体でも上映されるべきです。平和団体の会員や支援者は大変楽しめるだけでなく、勇気づけられるでしょう。また、平和運動に新しく参加した人は、その世界を変える力を確信するでしょう。

(翻訳:赤松敦子)



この通信は、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根和代、安齋育郎、キヤ・キムによって編集されました。

また日本語版の翻訳は、赤松敦子さん、狩俣英美さん、寺沢京子さん、山本美穂子さん、山根和代が担当しました。この通信は、INMP の個人と組織をつなぐ重要な場です。また INMP の会員ではない方が世界の平和博物館の活動を知る上で、大変重要です。

以前発行された通信は [INMP の新ウェブサイト](#) で読むことができます。

<http://tinyurl.com/INMPMuseumsForPeace/>

INMP の通信は年に 4 回発行されますが、定期的に読みたい方は、メールアドレスを次のメールにお知らせ下さい。

[inmpoffice@gmail.com](mailto:inmpoffice@gmail.com)

2019 年 3 月に発行される次号に投稿したい方は、2019 年 2 月 15 日までに原稿をお願いします(英文で 500 語以内、日本語の場合 1000 字以内、写真 1-2 枚)。直接英語による原稿を書くことに困難がある場合には、以下の INMP 日本事務局にご相談ください。

[inmpoffice@gmail.com](mailto:inmpoffice@gmail.com)



ジェネラル・コーディネータ  
からのお知らせ

安齋育郎

すでにお知らせしている通り、「平和のための博物館国際ネットワーク」(INMP)の事務局は、2018 年 7 月 1 日をもって、オランダのハーグから京都の立命館大学国際平和ミュージアムに移りました。移転に伴う会計事務の引継ぎなどに予想外の時間を要しましたが、京都事務局をベースキャンプとする INMP の新たな活動は順調に船出しつつあります。

このニューズレターは従来通り年 4 回発行され、毎月発行の『ジェネラル・コーディネータのデスクから』ともども、日本人の会員の皆さまには日本語版もお届けしています。実は、英語圏以外で母国語版を発行しているのは日本だけで、翻訳費の捻出にはそれなりの苦労があります。INMP 役員である山根和代さんや私、給与保障のある業務中に翻訳に取り組むことを認められている方以外の翻訳協力者には、僅かですが翻訳料をお支払いしています。INMP は 2019 年度から、一般会計とは別に「翻訳基金」をつくり、この日本支部固有のサービスを今後も継続していくことにしています。会員外の方々の理解あるご寄付も有難く頂いていますが、会員の皆さまからのご協力も心よりご期待申し上げます。会費納入時に「+α」をご考慮頂ければ大変幸いです。

(2019 年 2 月 4 日記)